

NAJIMA

NAjia=Asia

編集後記  
なしまあ  
—Accessible Asia—

アジア地域研究所の年報『なしまあ』の特別号として、科学研究費「渡海者のアイデンティティと領域国家」の成果の一端をお届けします。2019年度に開催したシンポジウムの成果に基づく『アジアの海を渡る人々—一六・一七世紀の渡海者』(上田信・中島楽章編、春風社、2021年度3月)に続く、一八・一九世紀の渡海者を取り上げた論考を収録しています。

感染症COVID-19は、科研プロジェクトにも影響を与えました。大英図書館やスコットランド国立図書館などで行う予定にしていた海外史料調査は延期され、メキシコの教会壁画「長崎二十六聖人」の修復に向けた予備調査は断念せざるを得ず、国内での研究会も開催を見送りました。しかし、何かいいことは、と振り返ってみると、オンラインでシンポジウムを開催できたことがありました。2021年1月末に、アジア地域研究所主催シンポジウム『港市と渡海者—港を結ぶネットワーク』では、遠方に在住の方もアクセスが可能となり、活発な議論が展開されました。

歴史を振り返ると、渡海者と感染症とのあいだには、深い因

縁があります。14世紀にヨーロッパで広がった黒死病の始まりは、1347年10月に航海を終えてシチリア島メッシーナ港に入港した1隻の帆船であったとされています。16世紀にアメリカ大陸先住民の人口を激減させた天然痘などは、スペインの渡海者が持ち込みました。1817年にインドで始まったコレラが世界規模のパンデミックとなったのも、海上交易の展開と無関係ではありません。さらに、19世紀なかばに雲南に起因するペストは、グローバルな貿易のハブであった香港に伝播したことで、一気に世界に広がることになったのです。今回のCOVID-19でも、2020年2月に豪華クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号における感染が連日のように報道されたが、その後の感染拡大のなかで、人々の口の端にもはや上がらなくなっています。しかしこれらの事実は、けっして忘れてはならないでしょう。

感染症に対する検疫(quarantine)は、14世紀にベネチア入港に際し40日間の海上での停泊が求められたことに由来します。いまあらためて、病原と渡海者と検疫との関係を、深く考察する必要があるのではないのでしょうか。(上田信)

● 海域アジア史研究の泰斗

1980年代にオーストラリア国立大学(ANU)大学院に在籍した筆者は、アンソニー＝リード先生(写真中央)の指導を受けた。当時先生は、*Southeast Asia in the Age of Commerce*, (New Haven and London, 1988, 1993)の2巻本を執筆中であった。そこでは、近世の海域ネットワークが形成する東南アジア社会や生活文化が描かれた。また近年の*A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*, (Chichester, 2015)は、東南アジア世界の展開を古代から現代まで統合的にとらえる。この地域への深い思いがうかがえる。その後、カリフォルニア大学、シンガポール国立大学に在職し、現在はキャンベラに戻り、ANUにも顔を出されている。(弘末雅士)



なしまあ -Accessible Asia- 特別号

- 発行/2021年6月30日 ●編集/立教大学アジア地域研究所 上田信
- 制作/たまさや ●表1-4デザイン/犬山ハリコ ●印刷/立教プリンティングステーション ●ISSN 2188-8213



立教大学アジア地域研究所 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

Tel:03-3985-2581 Fax:03-3985-0279 E-mail:ajiken@rikkyo.ac.jp https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/caas/

なしまあ  
親しみ深きアジア  
—Accessible Asia—



特集  
アジアの海を渡る人々  
—一八世紀—二〇世紀

序章 18・19世紀にいたる渡海者の変遷/上田信 18-19世紀ビルマにおける海上貿易/渡邊佳成  
海のアルメニア商人たち—近世・近代アジアの海域交易集団を考える/重松伸司  
リヴィングストンの最後のアフリカ探検にみえる第1期ナーシク・ボーイズの渡海経験—1866年から1873年まで/鈴木英明  
東インド文学とインドネシア民族主義—植民地支配者と異なるヨーロッパ人との出会い/弘末雅士  
モハンマド・ラシディの「知識を求め旅」—20世紀前半におけるインドネシアからカイロへの留学/山口元樹

疇谷憲洋 弘末雅士

特別号  
2021